

学生の対人援助場面における認知的ずれと心理的距離 — 発達心理療法的観点からの検討 —

Student's cognitive embarrassment and psychological distance on personal helping seans

山本 眞利子

Abstract

In this study, student's cognitive embarrassment and psychological distance about two personal helping seans were investigated. Students have read two personal helping seans and rated on cognitive reaction scale and psychological distance on 6 points. Results suggested that when students experienced small cognitive embarrassment, they felt client nearly.

key word : personal helping seans, cognitive embarrassment, psychological distance.

目的

将来、保育士をめざす学生では、社会福祉現場での10日間の実習を行う。そこでは、学生は、援助者として利用者にかかわることが求められる。学生は、適切に利用者を援助できる場合もあるが、援助できない場合もある。なぜ、このような、違いが生じるのだろうか。保育実習の報告書(2001)からある学生の事例をあげてみよう。

事例1「私が今回の実習で一番難しいな、と感じていたのがT君でした。それは、初日の日にT君が私に『しっぱいして』と上着をズボンの中に入れるように求めてきたのですが、T君の思うように私が応えられなかったため、T君は『ちがう』と言って、2、3度私を叩いて自分の部屋に戻ってしまいました。私は、その時、突然のことだったのと、T君を不快な思いにさせてしまったことのショックで、どうすることもできず、そのまま終わってしまいました。また、T君は、他の利用者の方より言葉が話せるのですが、少しどもりがちの言葉なので、聞き取れず何度も聞き返してしまうと、自分の気持ちに通じない苛立ちのためか、『えーん』と言って私を叩いたりしました。」

事例2「実習も残り2、3日となったころ、だんだんとひとりひとりと会話ができるようになってきました。言葉のないTさんに『おはようございます』と言うと、笑ってくれました。また、以前、話しかけても反応がなく、目も合わなかったM1さんにも『おはようございます』と言うと、小さい声ではあったけど、『おはようございます』と返してくれました。いつもは、独りでしゃべっているM1さんですが、この時は、しゃべるのをやめ、私に言うてくれました。この時、M1さんの目が合うのを待って、目が合うようにして、目が合えば言うてみました。それから、M1さんの好きな

歌を歌うと一緒に歌い出しました。また、M2さんも言葉がありませんが、M2さんの腕をトントンとたたきながらM2さんの好きな歌を歌うと、M2さんは笑顔になり、自分の腕をふりながらリズムをとっていました。」

上記したように、学生が実習に出向き、適切な援助ができる事例2の場合と適切な援助ができない事例1の場合とがある。このような違いは、なぜ生じるのだろうか。事例を検討してみよう。事例1の場合では、実習生は、利用者の言っていることばの意味が理解できないでいる。実習生は、利用者が、上着をどのようにズボンに入れてほしいのかわからず、困惑している。利用者の意図することが、くみ取れず、困惑してうまく援助できていないのである。一方、事例2の場合には、実習生は、利用者が何を求めているのか理解しており、それを、利用者に伝えることができています。その結果、利用者との関係を形成しているのである。では、このような状況下では、何が起きているのだろうか。この点について、発達心理療法的観点から検討する。

Ivey (1991) の提唱した、発達心理療法は、ピアジェ理論を取り入れた理論である。山本 (2001) では、援助行動をこの発達心理療法的観点から捉え、特に援助行動と調節と同化に焦点を当てて検討している。では、調節と同化について述べる。山本 (2000a) (2001b) では、次のように考えている。調節は、人が、環境に自分を合わせることで環境に適応する。一方、同化は、人が周囲の情報にそのまま自分を合わせるのではなく、情報を自分の枠組みに合うように捉え直して自分なりの見方を形成することで、環境に適応する。人は、この調節と同化を繰り返して成長している。このように捉えると、先にあげた事例では、事例1では、実習生は、利用者と大きくずれて不均衡を経験し、自分の考えを相手に合わせるができなかった。つまり、調節できていないといえる。一方、事例2では、実習生は、利用者の考えが理解でき、相手と大きくずれておらず不均衡を経験しない。そのために、利用者の考えに合わせて調節できていると考えられる。では、このような場合、実習生は、心理的にどのような経験をするだろう。多くの場合、事例1のような状況では、実習生は、相手から心理的に逃げってしまうのではないだろうか。一方、事例2のような状況では、実習生は、相手との心理的近さを経験するだろう。

つまり、上記のような観点に基づいて、実習生が、相手と大きいずれを経験するような場合では、心理的に遠さを経験し、相手とのずれを経験しない場合では、心理的近さを経験すると考える。

方法

1) 被験者

被験者は、将来保育士になるために、児童福祉関連施設での10日間の実習経験をつんだ、短期大学生計46名であった。

2) 材料

・事例

事例A及び事例Bは、施設実習を修了した学生の報告書を参考に作成したものであった。事例A及び事例Bの内容は、以下のとおりであった。

事例Aは、【児童養護施設で生活しているA子（小2の女子）は、週末になると、迎えに来てくれるはずの母親を待っている。この日も、朝から食事もしないで、玄関の前でじっと待っている。もう、4時近くになった。A子は、車の音がしたり、人の足音がするたびに、玄関の周りをうろうろし、来たかどうか確かめている。A子は、援助者に「もう、来た？もう、来た？」と何度も聞く。A子は、「どうしたんやろー来るって言ったのに…まだ、来んなー…。私のことなんか、どうでもええかなあー」ともらしている。】というものであった。

事例Bは、【知的に障害のあるB子（小2）は、施設で生活している。B子は、ある朝、歯を磨いていた。援助者が、それを手伝っていた。B子が、自分で奥の方を磨くことができなかったので、援助者が手伝っていた。援助者は、「B子ちゃん、これできれいになったよー。よかったね。」といながら、「じゃーゆすごうね。」と促していた。B子は、その声かけにしたがって、何度か、自分で口の中をゆすいで、タオルで口をふいた。その時、B子の手が、援助者の顔をめがけて飛んできた。】というものであった。

・ 評定項目

認知的ずれ反応評定項目は、山本（1998）を参考に次の5項目からなっていた。

- 1) あいてとのずれを感じる
- 2) あいてとの違いを感じる
- 3) あいての反応に驚きを感じる
- 4) あいてによっていろいろ考えさせられる
- 5) あいてによって刺激を受ける

これらの評定項目の内的整合性は、確認されていた。

心理的距離に関する項目は、次のようだった。

あなたは、今、あなたは、この子から心理的にどれくらい近くにいると思いますか。

- ⑥とても近くにいる
- ⑤近くにいる
- ④まあまあ近くにいる
- ③まあまあ遠くにいる
- ②遠くにいる
- ①とても遠くにいる

3) 手続き

被験者の計23名は、事例A、事例Bのそれぞれの事例を読んだ後、被験者は、‘あなたが、この援助者として、以下の各項目について、最も当てはまるところ一つに○をつけてください。’との指示に従い、認知的ずれ反応評価項目に6段階で評価を行った。評価は、“全然思わない1点”、“思わない2点”、“あまり思わない3点”、“まあまあ思う4点”、“思う5点”、“非常に思う6点”のうち、最も当てはまるところ一つに○を付けるというものであった。また、心理的距離については、先の23名を含む実習経験を10日間積んだ46名全員に、事例A、事例Bそれぞれの事例を読んだ後に、‘あなたは、今、この子から心理的にどれくらい近くにいると思いますか。’の指示に従い、6段階で最も当てはまるところ一つに○を付けた。このとき、事例A及び事例Bの提示は、事例A→事例B、事例B→事例Aと半数ずつなるように設定されていた。

結果

1) 認知的ずれ反応評価得点

事例Aと事例Bのそれぞれの認知的ずれ反応評価得点を算出した。Table. 1 は、事例A及び事例Bの認知的ずれ反応評価得点の平均値、標準偏差とt検定を行った結果を示したものである。

Table.1 認知的ずれ反応評価得点			
	事例A	事例B	t値
平均値	15.83	24.00	-9.73 **
SD	3.35	2.97	
P<.01 **			

Table. 1 の結果は、事例Aは事例Bに比べて、認知的ずれ反応評価得点が低いことを示している。これは、被験者が、事例Aでみられる利用者には、相手との違いをあまり感じなかったことを示している。つまり、ある程度、相手のことが理解できたこと、相手のことが了解できたことを示している。

2) 心理的距離評価得点

事例Aと事例Bのそれぞれの心理的距離評価得点を算出した。Table. 2 は、事例A及び事例Bの心理的距離評価得点の平均値、標準偏差とt検定を行った結果を示したものである。

Table.2 心理的距離評価得点			
	事例A	事例B	t値
平均値	4.39	2.96	6.62 **
SD	0.82	1.28	
P<.01 **			

Table. 2 の結果は、事例Bに比べ事例Aで、心理的距離が近いことを示している。これは、被験者が、事例Aの利用者には、心理的に近くにいたことを示している。

考察

本研究では、実習生が、実際に援助するにあたり、どのようなことが生じているのかを検討するに際し、それを、Ivey (1991) の発達心理療法的観点から捉え、学生が利用者との間に経験する認知的ずれの程度が影響していると考えた。予測としては、実習生が利用者との間に大きい認知的ずれを経験していない方が、実習生は適切な援助ができるのではないかと考えた。本研究では、上記のような予測から、認知的ずれの大きさと、援助との関係について、直接には扱わなかった。だが、その援助行動と関連するだろう心理的距離について扱った。つまり、認知的ずれが小さい場面では、援助者は、利用者に心理的に近くにいることができると考えた。研究結果は、これを支持した。このような結果から、援助者が相手とあまりずれを経験していない場合では、援助者は、相手から心理的に近くにおり、それが、ひいては、より適切な援助行動へとつながっていくと考えられた。

そのために、今後は、認知的ずれの大きさと、心理的距離及び援助行動との関連について検証する必要がある。なお、先にあげたように、この認知的ずれの大きさは、援助者の調節や同化にも影響を及ぼすと考えられる。相手とのずれをあまり経験しない援助者は、利用者に自分を合わせやすく調節しやすい。また、調節することで、援助者は、利用者の行動や心理、状況を自分なりに捉えなおして、自分なりの見方を形成することができるだろう。つまり、同化することができるだろう。そして、それが、より適切な援助行動へとつながっていくと考えられる。今後、この点についても、検討する必要がある。

引用文献

- 岡山県立大学短期大学部健康福祉学科児童福祉専攻 2001 保育実習（児童入所施設）報告集。
- Ivey, A.E. 1986 Developmental therapy. California (福原真知子・仁科弥生 共訳 1991 発達心理療法—実践と一体化したカウンセリング理論—丸善.)。
- 山本眞利子 1998 カウンセラーの原因帰属スタイルがカウンセラーと来談者の認知的反応評価に及ぼす影響 カウンセリング研究31, No.31, 3, 237-246.
- 山本眞利子 2000 援助関係・人間関係における『出会い』の枠組みに関する一考察 —発達心理療法的観点による事例の分析を通して— 四国学院大学論集 第102号, 57-66.
- 山本眞利子 2001a 発達心理療法的観点による学生の認知的反応と援助行動の可能性 投稿中.
- 山本眞利子 2001b 社会福祉現場実習における学生の援助行動パターン—対人関係での『出会い』をつくる相手の「ことば」— 福祉おかやま 19号, 30-34.

〔2001年10月31日受付〕
〔2001年12月25日受理〕